

夕顔物語

徳間書店



夕顔物語

昭和五十年十月十日 初刷

著者 加堂秀三

埼玉県比企郡嵐山町志賀三一六―七〇

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ十ノ一 郵便番号一〇五

電話 四三三―六二三一（代表）

振替 東京四四三九二番

印刷所 株式会社金羊社

製本所 大口製本

© Kado Shuzo, Printed in Japan

（乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えます）

¥ 890

夕顔物語

目次

第一章	青葉若葉	7
第二章	武庫川の宿	38
第三章	花	51
第四章	秋空	57
第五章	甲骨文	88
第六章	縁談	120
第七章	夜蟬	144
第八章	風の町	174
第九章	春宵	196
第十章	ペンダント	209

第十一章 焚火 229

第十二章 水の精 237

第十三章 針山 250

第十四章 雪の里 257

あとがき

装幀・扉カッ ト 宮田雅之

夕
顔
物
語

第一章 青葉若葉

1

書道を捨てて二年になる北見冴子が、以前恋仲だったこともある芝崎基裕もとひろに、君は結局夕顔なんだよ、源氏物語夕顔の巻にでてくる、あの薄幸短命の女性なんだよといわれたのは、冴子が二十一になった年の、秋口のことであった。

その日は、神戸の町に、台風崩れの生温かい風が折おり強く吹いて、雨こそ降らないが、空の雲が、寝乱れた蒲団のようによじれていた。

そんな陽気だったから、前夜六甲で馬鹿遊びをしてきた冴子は、いつもにもまして体がだるく、気持が投げやりになっていた。それで普段にはないことだが、昼日中三宮駅へ降り、生田神社の裏側にある、叔父の家まで帰ってきた。

すると家のまえに男がひとり立っていた。

冴子は芦屋、甲東園あたりから、このごろ彼女が見さかもなくつきあっている不良大学生が、恨みや怒りや欲望を胸に、彼女を張りにつきたのかと最初思った。

しかし男は不良学生ではなかった。

不良どころかコチコチの国文学信者で、別れた頃の歳から計算すると、もう大学院もでて、助教授のヒヨコくらいにはなっていそうな、亀岡生れの芝崎基裕なのであった。

芝崎と別れてから二年の間に、二度まで自殺を試み、幾人も恋の相手をかえて、体も心も荒れるにまかせて生きている冴子は、芝崎を見ても、べつに懐しいとも何とも思わなかったが、しかし男からの誘いは、相手が誰でも、誘いの中味がどんなことでも、決して断らないようになっていた冴子だった。

だから芝崎に、

「ちょっと話したいことがあるんだけど」

と、半分標準語で話しかけられ、思いつめたような眼で睨められると、振りきって家のなかへ入ってしまうワケにもいかなかった。

ついふらふらとこの駅裏の喫茶店まで、芝崎についてきた。

すると芝崎が照れもせず、源氏物語夕顔の巻などといいだしたのである。

冴子はあきれたが、あきれて見せる義理もないと思ひ返して、黙っていた。

このとき彼女は唐突に、「両方エエのは頬かむり」という言葉を思ひ出した。

両方いいのは頬かむりくらいで、滅多にそんないいものはないという意味であった。能勢で
冴子が書を習っていた頃に、師匠の笹部民蔵がよく使っていた。

冴子は心のなかで、

へ両方エエのは頬かむりへ

と呟いてみて、シャレのめした、軽薄そのものの、芦屋、六甲界限の学生たちを想いうかべ
た。

彼等は体格がよく、踊りがうまくて、女の扱い方もよく心得ていた。しかし例えば疲労困
憊、そういう漢字ひとつ読めなかった。

大学へは一年行っただけの、冴子にさえ読める字が、彼等にはまるで読めなかった。

疲労困憊はヒロウコンバイではなく、ヒロウコンビなのであった。

ふざけていうのでもなんでもない。大真面目にそう読むのだった。

そう読んで恥じなかった。

冴子は、

へああ、わたしは今日、ヒロウコンビしているなへ

と考え、ニッと笑って、以前よりちょっと男くさくなった芝崎の顔を見た。

男くさくなった点は悪くなかったが、ヒロウコンビした体で源氏物語の話を聞くのは、大儀なことであつた。

2

「君も一年だけにしろ国文科へ通ったひとだ、無論知っていると思うけど、夕顔というのは源氏物語中の女性で、実際に出てくるのは夕顔の巻一巻だけだが、話としてなら、帚木はきぎの巻にも出てくる。——帚木の巻の、雨夜の品定めのところに出てくるんだよ」

芝崎が続けた。

彼はどういうワケか、努めて東京風に話そうとしていた。

もっともそのアクセントは、近ごろ東京者の学生と遊ぶこともある冴子の耳には覺つかないものに聞こえたが、しかしテレビと新幹線との偉力だろうか、彼の標準語も、まんざらではなかった。

「夕顔の巻の夕顔は、知っていたら思いだして欲しいが、最初頭中将というひとに愛されているんだよ。ね。頭中将はのち致仕太政大臣になる人物なんだが、それはともかく、夕顔はその頭中将ちゅうしやうと契ちがひって、なかに玉鬘たまかづらという子供まで生れるんだ」

話しているうちに芝崎の顔が、一種の生氣をおびてきた。

真つ昼間、万事がヨーロッパ風になっている喫茶店で、源氏物語の話など聞かされるのは、どう考えてもそぐわなかったが、しかし芝崎基裕という真面目男は、やっぱり源氏の世界が好きなのだろう。

冴子はニッコリした。

契ちぎって、なんて、ずいぶん久しぶりに聞く言葉だと思つたのである。

「子供まで生れるんだが、しかし……」

芝崎は冴子の笑顔をどう取ったのか、今日初めての、照れたような笑いを見せ、

「……しかし、そこは源氏物語に登場する女性だからね、のちに光源氏ともナニするんだよ」

「……お父さんは、……」

「そう、お父さんは三位の中将で」

「ああ、そやそや、三位の中将で、……よりてこそ、ナントカか」

冴子もだんだん思い出した。

思い出したが、わざと言葉を別にした。芝崎には合わさずに、関西弁にした。

そこに冴子の、理由のハッキリしない抵抗があった。

しかし芝崎にはそんな抵抗など、通じなかった。

「そやそや、思い出したやろ！——よりてこそ、それかとも見めたそがれに、ほのぼの見つる

花の夕顔。——アレやがな」

彼はすっかり有頂天になってしまった。

有頂天になると、標準語が崩れた。

この三十ちかい男の「大真面目」は、ひとの善さと或る鈍さから出来ているらしかった。

「いや、その花の夕顔がや、日まで覚えてるぜ、十九の年の八月十六日にや、光源氏に伴われてやな、源氏の家へ行くやろな。その院、——河原院へ行くやろな。それで物の怪に襲われて死んでしまう。その夜のうちに死んでしまう。十九を一期に死んでしまうのや。なあ、そうやろ？」

芝崎はもう笑ってはいなかった。

眼に、これまでにない光が宿っていた。

冴子も、彼を揶揄する余裕をなくした。

へこままでいわれなわからん……。鈍いのはどっちやのん！

冴子は自分で自分を嘲った。

3

「そのとき源氏は十六やった。光源氏は十六やった」

芝崎が、冴子を何かで突き刺すようにそういった。

言葉つきは静かだった。

しかし冴子の心には、刺されるような痛みが走った。

「冴ちゃん、ぼくは今日、恨みをいいにきたんと違うでエ。用事は、——用事はほかにあるねんでエ。ただここのところを、——この夕顔の話をせんと、どうしても今日の用事へ行き着かん。そんで話すのや。——そんで話すのやさかい、怒らんと、——そこ立たんと、話を最後まで聞いて欲しいねんけど、田村正雄も、——君の光源氏も、やっぱりあのとき十六やった」

芝崎が身を乗りだしてきた。

冴子は自分ながら青くなっているのがわかる顔をあげ、芝崎をキッと睨んだが、芝崎はひるまなかった。

「そして君は夕顔と同じ十九歳で……」

彼は堂堂と話しつづけた。

冴子は芝崎から顔をそむけて、唇を噛んだ。すると、

「その顔がまた色っぱいぜ」

と、いつかどこかで誰かのいった言葉が、冴子の耳に甦ってきた。

喫茶店の外はいつのまにか、雨になっていた。

4

冴子は大阪府北部の、能勢というところで生れた。

能勢は山国で、冬が長く、春が遅かった。

土地のひとびとは浄瑠璃、謡曲など芸事が好きで、なかなか吝嗇^{りんしやく}で、ごく勤勉であつた。

そしてこの地からはいい米と、大粒の栗と、香り高い松茸がとれた。

それから冬場には寒天、高野豆腐などの製造も行われていた。

寒天や高野豆腐が作れるくらいだから、冬場の能勢の寒さは格別で、雪も深かつた。

能勢は京都府と兵庫県とに隣接する小さな町なのだが、その京都府も兵庫県も、ともに昔丹波と呼ばれた部分だけを、能勢町にくっつけていた。

だから言葉を初め、風俗習慣まで、能勢の生活の様式は、万事が丹波風になっていた。

大阪府だが、大阪の風^{ふう}からは遠いものが多かつた。

冴子の生れた北見の家は、その能勢の地に、三代続いた造酒屋であつた。

家には酒蔵、土蔵、納屋、離れのほかに、長細い、深い、くらい水をたたえた池があつた。

池には鯉や鰻が沢山いて、客があると、食卓を飾つた。